室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(八)

石澤一志・武井和人・日高愛子

【緒言】

小論の目的は、未刊・未整理のまま残されてゐる多く室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）の内、現在に至るまで全文の釈文が公にされてゐない歌会資料について、釈文を提供することにある。

底本とした伝本は、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『三条西実隆日課草』〔五〇三・二四二〕である。

底本の書誌については、**【略解題】**を参照されたい。

釈文作成にあたり、以下の方針に従つた。

(1)漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2)丁移りを、」一・」一一の如く示した。

(3)底本は一首二行書であるが、多くの書入れが存する。そのため、一首一行書とはせず、原本の形態を保存した。

(4)墨で塗りつぶされて消されてゐる場合は、字数分■で示した。ただし、元の文字が判読出来る場合は、〔は〕の如く示した。

(5)墨線にて消されてゐる場合は、文字上に罫線を引いて示した。

(6)各歌題ごとに、『文明千首』（国立公文書館〔旧内閣文庫〕蔵本）及び『雪玉集』（新編私家集大成による）における歌形を示した。

(7)『文明千首』に関しては、高松宮本・青山歴史村蔵本との異同を※以下に後掲した。ただし、校合本の明らかな誤写・仮名遣の相違等は、原則として掲出してゐない。

礎稿作成担当者は、以下の通りである。

（一）～（六九）　武井
（七〇）～（一三八）　石澤
（一三九）～（一九一）　日高
略解題　武井

本研究は、ＪＳＰＳ科研費　ＪＰ２６３７０２００、ＪＰ１７Ｋ０２４０７の助成を受けたものである。

（武井和人）

逍遙院詠草　（外題〔題簽〕）」

日課草　文明十三
詠草　九月　（扉題〔原表紙〕）」

立春雪九月一日

天の戸の雪を夜のまの光にて
あけぬさきより春やきぬらん（一）
／このねぬる夜のまの雪の晴そめて
けさたつ春の光見すらし（二）
端之詠下句ある様に存候　如何

文明千首　＊七※

立春雪　侍従中納言

このねぬる夜のまの雪の明※※そめてけさ立春の光みすらむ

※『文明千首』ノ歌番号ハ、三村晃功「（資料紹介）内閣文庫蔵『文明十三年着到千首』―解題・本文・初句索引―」（『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』四二、二〇〇四・一二）ニヨル。以下同様。

※※明―晴（高）

雪玉集　＊巻一・春・二一

立春雪

このねぬるよのまの雪の晴そめて　今朝立春の光みすらし
（于文明十三）

子日松二日

／ねの日する松は二葉のかけなから
おひさきしるき色そこもれる（三）

いつよりか春の初子の姫小松
千世のためしにひきはしめけん（四）

文明千首　＊一七

子日松　［作者名闕］

※ねのひするまつは二葉のかけなからおひさきしるき色そこもれる※※

雪玉集　＊巻一・春・四六

※合点アリ（高）　※※おひさき―おきさき（高）

（子日松）

ねのひする松は二葉のかけなから　おひさきしるき色そこもれる
（于文明十三）

河霞三日

立わたる霞のみおはしつかにて
はや瀬もみえす春の山川（五）
／落てゆくなかれもみえすみなの河
ふかき霞の渕と成つゝ（六）

文明千首　＊二七

川霞　侍従中納言

落て行なかれも見えすみなの川ふかき霞の渕となりつゝ

雪玉集　＊巻一・春・八一

河霞

おちて行なかれもみえすみなの川　ふかき霞の淵と成つゝ
（于文明十三）

暁鶯四日

鶯のまたのこる夜になくこゑは
（あか月ふかく）

めさますはかりめつらしき哉（七）

＼暁のゆふつけ鳥のそれならて
春の時しる鶯の声（八）」一

文明千首　＊三七

暁鶯　　侍従中納言

※暁のゆふつけとりのそれならて春の時しる鶯のこゑ

※合点アリ（高）

雪玉集　＊巻一・春・一〇八

暁鶯

暁の夕つけ鳥のそれならて　はるのときしるうくひすの声

打むれてわかなつむのゝ花かたみこのめも春の雪はたまらす（続古今・春上・二二）

水辺若菜五日　此歌近集ニ入たる歌かと覚候さ候はゝ可同類候歟

氷とけうちいつる浪の花かたみ　但古人歌候はゝ可為本歌候

このめも春のわかなつむ也（九）

此愚詠氷のとけ所沢とも河とも候はてハあしく候歟但又かやうにも候へき歟如何

＼里人のわか菜をあらふ末ならし
小河の水のにこりてそ行（一〇）

文明千首　＊四七

水辺若菜　　侍従中納言

さと人のわかなをあらふすゑならし小川の水のにこりてそゆく

雪玉集　＊巻一・春・一四二

里人のわかなをあらふすゑならし　小川の水のにこりてそ行

夜梅六日　＼より

＼梅花やみにまきれぬ匂ゆへ
みえこぬ色も面影そたつ（一一）
閨のうちは梅かゝふかき移香に
独ぬる夜の袖としもなし（一二）

文明千首　＊五七

夜梅　　侍従中納言

梅の花やみにまきれぬ匂ひよりみてこぬ色も　※本ノマヽ

※本ノマヽ—ナシ（高）

雪玉集　＊巻一・春・一八八

夜梅

梅花やみにまきれぬ匂ひより　みえこぬ色もおもかけそたつ

若木梅七日

さくことををしへぬ春も知そめつ
ちらんもさそな宿の梅かゝ（一三）
＼さそひくる風には梅のいつれとか
わか木にさくもおなし匂を（一四）

文明千首　＊六七

若木梅　　侍従中納言

※さそひくる風には梅のいつれとは若木にさくも同し匂ひを

※さそひ—さけひ（青）

雪玉集　＊巻一・春・二二七

若木梅

さそひくる風には梅のいつれとか　わか木にさくもおなし匂ひを

樵路早蕨八日

／真柴には心もいれす山人の
折手にあかぬ初蕨哉（一五）
やすらひに野への早蕨折そへて
妻木のかへさ猶や暮なん（一六）」二

文明千首　＊七七

樵路早蕨　　侍従中納言

真柴にはこゝろもいれす山人のおるてにあかぬ初※わらひ哉
※初－袖（青）

雪玉集　＊巻一・春・二八二

樵路早蕨
于文明十三
真柴には心もいれす山人の　おる手にあかぬはつわらひ哉

庵春雨九日

／草の庵そ雨に［くち］行野も山も
春の緑にあらたまれとも（一七）
かりふきに草はくちゝ行軒は哉
木のめは春の雨を待ても（一八）
木のめはる雨にはもれぬ色なから
かりふく草［は］［軒］にくち行（一九）

文明千首　＊八七

庵春雨　　侍従中納言

草の庵そ雨に※（ママ）たり行野も山もはるのみとりにあらたまれ共※※
※たり－ふり（高）たり（青）
※※あらたまれ共－あとたまれ共（高）

雪玉集　＊巻一・春・三三三

庵春雨
于文明十三
草の庵そ雨にふり行野も山も　春のみとりにあらたまれとも

峯帰雁十日

／しはしともことつてやらん程もなし
ねこし山こしいそくかり金（二〇）
もろこしにありてふ峯かかへる雁　しもしたゝさのみ耳には立候はね共
行ゑもあかぬ山の面影（二一）　如此候へき歟

文明千首　＊九七

嶺帰雁　　侍従中納言

しはしともことつてやらん程そなきねこし山こしいそく雁かね

雪玉集　＊巻一・春・三五〇

嶺帰雁
于文明十三
しはしともことつてやらむ程そなき　ねこし山こしいそくかり金

野遊十一日

／心ひく野への円居に日をそつむ
若菜小松のたよりならても（二二）
あひにあひて花鶯の色ねさへ
心をのへの春のまとゐに（二三）

文明千首　＊一〇七

野遊　　侍従中納言

心ひく野へのまとゐに日をそつむわかな小松のたよりならても

雪玉集　＊巻一・春・五六三

野遊

心ひく野へのまとゐに日をそつむ　わかな小松のたよりならても（于文明十三）

暁花（十二日）

明やらぬ花のよそめは有明の
かすみにのこる遠の山のは（山のはの空）（二四）

＼有明の月よりおきてみつる哉
つれなき花もけふはさくやと（いま歟）（二五）」三

文明千首　＊一一七

暁花　［作者名闕］

有明の月よりおきてみつる哉つれなき花も今はさくやと

雪玉集　＊巻一・春・四二七

（暁花）

晨明の月よりおきてみつるかなつれなき花も今はさくやと（ママ）

関花（十三日）

＼あふ坂や風しつかなる花の色に
関の戸さゝぬ春はしるしも（程もみゆらし）（に）（二六）
夜るとなき花の光にをのつから（暮やらぬ）
戸さしわするゝ春の関守（二七）

文明千首　＊一二七

関花　侍従中納言

あふ坂や風しつかなる花の色に関の戸さゝぬ春はしるしも

雪玉集　＊巻一・春・四五五

関花

相坂や風しつかなる花の色に　関の戸さゝぬ春はしるしも（于文明十三）

花雲（十四日）

山桜よをへてちらぬ花ならは（ちらて世をふる）（色もかな）
所もさらぬ雲と見ましを（るまて）（二八）
夜のまにや花さきぬらし嶺の雲
昨日はかゝる色もみさりき（二九）

＼よし野山みぬ［世⇩世］（？（上書））春のなかめまて
雲にこもれる花さかり哉（立そふ）（三〇）
＼とめて［くも］~~れ木~~　雲の色哉

文明千首　＊一三七

花雲　侍従中納言

吉野山みぬ世の春のなかめまて花にこもれる雲の色哉※

※合点アリ（高）

雪玉集　＊巻一・春・四九〇

（花雲）

よしの山みぬ世のはるのなかめまて　花にこもれる雲の色かな（于文明十三）

花衣（十五日）

＼花の色に心をそむるかり衣（心をは花にそめ行）
きてはかへらん木陰ともなし（三一）
色あひもえならぬ花やさほ姫の
とを山すりの春の衣手（三二）

文明千首　＊一四七

花衣　侍従中納言

こゝろをは花にそめ行かりころもきてはかへらん木陰ともなし

雪玉集　＊巻一・春・五〇七

（花衣）

于文明十三

心をははなにそめ行かりころも　きてはかへらん木陰ともなし

落花十六日

さくら花つらき所のおほかれや

木すゑはなへて

いつくの木〻もあらし吹比（三三）

／はては又風をもまたす散にけり

／世のことはりを花にみよとや（三四）」四

つねなき世をは

文明千首　＊一五七

落花　侍従中納言

※（マヽ）

けさは又風をもまたすちりにけり世のことはりを花にみよとや

※合点アリ（高）

雪玉集　＊巻一・春・五二八

（落花）

于文明十三

はてはまた風をもまたす散にけり　世のことはりを花にみよとや

野菫十七日

／すみれ草をの〻芝生の露の底に

／かけのうちに

ひとりまきれぬ色もなつかし（三五）

花は

わけかへる袖そしほる〻すみれつむ

をの〻芝生の春の夕露（三六）

文明千首　＊一六七

野菫　侍従中納言

すみれ草をの〻芝生の露の底に花はまきれぬ色もなつかし

雪玉集　＊巻一・春・二七一

野菫

于文明十三

すみれ草をの〻芝生の露の庭に　花はまきれぬ色もなつかし

池欵冬十八日

／山吹の花こそうつれ春の池の

／にほへ

いひ出かたき色をふかめて（三七）

うつし

うつろへる影も見さひの色なれや

はらはぬ池の山吹の花（三八）

文明千首　＊一七七

池山吹　侍従中納言

※

欵冬の花こそうつれはるの池のいひ出かたき色をふかめて

※合点アリ（高）

雪玉集　＊巻一・春・五七八

池款冬

于文明十三

山吹のはなこそみつれ春の池の　いひ出かたき色をふかめて

江藤十九日

／住の江やこゑうちそへぬ波なれや

／に／さきそふ藤や　松風に

／松吹風になひく藤かえ（三九）

こゑうちそへぬなみとみゆらし

かもめゐるおきつすならてさきかゝる

なみに藤江の名をやかけまし（四〇）

みて

文明千首　＊一八七

江藤　侍従中納言

住の江に声うちそへぬ波なれや松ふく風になひく藤か枝

雪玉集　＊巻一・春・五八四

江藤

住のえにこゑうちそへぬ波なれや　松ふく風になひく藤かえ

惜三月尽廿日

〃いかにせんなかき日影もはては又
夕くれいそくけふの別を（四一）
かねてよりしたふ心のつきはてし
春はかきりのけふにもある哉（四二）
〃けふやさは日数はかきり行春を　※「〃」、他ノモノニ比シテ小字也
したふ心は花に尽しを（四三）」五

文明千首　＊一九七

惜三月尽　　侍従中納言

※けふやさは日数はかきり行春をしたふ心は花につきしを
※けふや―けふは（青）

雪玉集　＊巻一・春・六一五

惜三月尽

けふやさは日かすはかきりゆく春を　したふこゝろは花につきしを

文明十三

籬卯花廿一日

きえぬ雪入かたしらぬ月影や
籬は山とさけるうの花（四四）
〃わすれてはいつれの年の雪かとも
わかぬまかき［の］さけるうの花（四五）

文明千首　＊二〇七

籬卯花　　侍従中納言

忘れてはいつれのとしの雪※そともわかぬまかきやさける卯の花
※雪―雲（高）

雪玉集　＊巻二・夏・七〇〇

籬卯花

文明十三

わすれてはいつれのとしの雪そとも　わかぬ笆やさける卯のはな

月前郭公廿二日

これそこの世ににさりける郭公
月にかたらふ夜半の一こゑ（四六）

文明千首　＊二一七

月前郭公　　侍従中納言

※これそ此世ににさりける時鳥月にかたらふ夜半の一こゑ
※三村論文・初句索引「これそこれ」。
これそ―これ（ママ）（高）

雪玉集　＊巻二・夏・七二八

月前郭公

文明十三

是そこの世ににさりける時鳥　月にかたらふ夜半の一こゑ

岡郭公廿三日

〃五月にもならしの岡の郭公
里はあれてもふりぬこゑ哉（四七）
なけや猶いまはたをのか五月にも
ならしの岡の山ほとゝきす（四八）

文明千首　＊二二七

岡郭公　　侍従中納言

五月にもならしの岡の時鳥里はあれてもふりぬ声哉

雪玉集　＊巻二・夏・七三四

岡郭公

五月にもならしの岡のほとゝきす　さとはあれてもふりぬこゑ哉（于文明十三）

田家早苗（廿四日）

／秋風の稲葉の底にみし庵の
あらはにいまは早苗とる也（四九）
小山田や稲葉のおくにいつかみん（又や）
かりほあらはに早苗とる也（五〇）」六

文明千首　＊二三七

田家早苗　　侍従中納言

秋風の稲葉のそこにみし庵のあたにも今は早苗とるなり（※（ママ））

※あたにも―あたに（ママ）（高）

雪玉集　＊巻二・夏・七六〇

田家早苗

秋風のいな葉のそこにみし庵の　あらはにいまは早苗とる也（于文明十三）

夜五月雨（廿五日）

くるとあくとわかぬはかりの雲も猶（物からあまの戸のも）
よるはしるしや五月雨の空（雲）（五一）

／三わの山今夜もはれぬ空の月
いかに待みん五月雨の比（五二）

文明千首　＊二四七

夜五月雨　　侍従中納言

※みわの山こよひもはれぬ空の月いかに待みん五月雨のころ

※合点アリ（青）

雪玉集　＊巻二・夏・七六九

夜五月雨

三輪の山こよひもはれぬ空の月　いかに待みむ五月雨のころ（于文明十三）

夜水鶏（廿六日）

／まきの戸に月はおほろにさし入て（ふかき夜の月きおほろなるまきの戸に）
たゝく水鶏のこゑのまちかさ（五三）

文明千首　＊二五七

夜水鶏　　侍従中納言

真木の戸に月はおほろにさし入てたゝく水鶏の声のまちかき（※）（※※）

※戸―や（高）　※※まちかき―まちかさ（青）

雪玉集　＊巻二・夏・七七七

槇の戸に月はおほろにさし入て　たゝく水鶏の声のまちかさ（于文明十三）

杜夏草（廿七日）

／秋にをく露いかならん夏たにも（此ころも）
しつくひかたき杜の下草（五四）
なにかいま（又）夏の気色の杜ならん
朝露ふかき（しめる）木ゝの下草（五五）

文明千首　＊二六七

杜夏草　　侍従中納言

秋にをく露いかならん夏たにもしつくひかたき森の下草

雪玉集　＊巻二・夏・八二七

杜夏草

于文明十三
秋にをく露いかならむ夏たにも　しつくひかたき杜の下くさ

水上蛍廿八日

あつめみよ心のみつはにこるとも
うきぬをたにもてらす蛍を（五六）
＼行ほたるうき水からの思ひとや（そとて）
なかれてけたぬ光なるらん（五七）」七

文明千首　＊二七七

水上蛍　　侍従中納言

＼行ほたるうきみつからのおもひそとなかれてもなをけたぬかけ哉※
※合点ナシ（高・青）　※※けたぬ―きえぬ（高）

雪玉集　＊巻二・夏・八〇六

水上蛍

于文明十三
行蛍うきみつからのおもひそとなかれても猶けたぬ影かな

池蓮廿九日

＼なひきあふ池の蓮の秋ちかみ（秋ちかき）（みたれあひて）
みさへ花さへ香ににほふ也（五八）
蓮葉のみとりをわけてたつをしの
羽ふきもかほる池の夕風（五九）

文明千首　＊二八七

池蓮　　侍従中納言

なひきあふ池のはちすの秋ちかみみさへ花さへ香に匂ふなり※
※なり―也（らし）（高）

雪玉集　＊巻二・夏・八三四

池蓮

于文明十三
なひきあふ池のはちすの秋ちかみ　みさへ花さへ香に匂ふなり

夕納涼十月一日

＼天つ日のかたふくまゝにすゝしきは
夕や夏の木かけなるらん（六〇）
風そ猶たちまさりける日晩の
なく音（こゑ）もちかき山の下かけ（六一）

文明千首　＊二九七

夕納涼　　侍従中納言

天つ日のかたふくまゝに涼しきは夕や夏の木かけなるらん

雪玉集　＊巻二・夏・八四七

夕納涼

于文明十三
天の日（つイ本）のかたふくまゝにすゝしきは　夕や夏の木かけなるらん

初秋夕二日

＼けさまては思ひもいれす夕くれの
色をまことの秋の初風（空）（六二）
けふよりそあはれこもれる夕は山
山くちしるき秋の色哉（六三）

文明千首　＊三〇七

初秋夕　　侍従中納言

けさまてはおもひもいれす夕暮の色※をまことの秋のはつかせ

※色―有（高）

雪玉集　＊巻二・秋・九二一

初秋夕

今朝（文明十三）までは思ひもいれす夕くれの　色をまことの秋の初かせ

七夕後朝（三日）

しるやいかに心をかしてほし合の
そらにことはる今朝の別を（六四）

＼こきかへるほとをうきせか天河
きのふもけふもおなしわたりを（六五）
（けさもきのふも）（船路）

端五文字名歌はふとしたる様候哉又第二句より主近愚老任候いたくかはらす候幸奥殊勝候」八

文明千首　＊三一七

七夕後朝　侍従中納言

＼こきかへる（※本ノマヽ）をうき瀬かあまの川昨日も今日も同し舟ちを
※　を―ほとを（高）（本ノマヽ）（＊歌頭ニ「本ノ」、青）

雪玉集　＊巻二・秋・九七八

（七夕後朝）

こきかへる程をうきせかあまの河　きのふもけふも同し舟路を

庭露（四日）

第二句思はしからす候御下句公宴いかヽ

朝夕にをきのみそひて秋の露
あたなる物のたえぬ庭哉（六六）

＼草ふかみはらはぬ庭も秋の露
かゝれは玉の砌（とやみ）なるらし（るゝん）（六七）

文明千首　＊三二七

庭露　［作者名闕］

草ふかみはらはぬ庭も秋のつゆかく※れは玉の砌とやみん

※かくれは―かゝれは（高）

雪玉集　＊巻二・秋・一〇四九

庭露

草ふかみはらはぬ庭もあきの露（于文明十三）　かゝれは玉のみきりとやみん

簷荻（五日）

＼さひしさはたゝ身［をさらぬ］（にとまる）宿なれや
軒はにとまる（をさらぬ）荻の上かせ（六八）
所せき軒はにきけは秋風の
あまるはかりの荻の音かな（六九）

文明千首　＊三三七

簷荻　［作者名闕］

※さひしさはたゝ身にとまる宿なれや軒はをさらぬ（※※すくる歟）荻の上かせ

※合点アリ（高）　※※さらぬ―さゝぬ（すくる歟）（青）

雪玉集　＊巻二・秋・九九九

簷荻

さひしさはたゝ身にとまる宿なれや（于文明十三）　軒はをさらぬ（すくる歟）荻の上風

原薄（六日）

しのすゝきをのゝしのはらをのれさへ
みたれあひてもしけき秋哉（露）（七〇）

＼露ふかき野原をゆけはをのつから

尾花の浪も袖ぬらしけり（七一）

文明千首　＊三四七

原薄　　侍従中納言

露ふかき野原をゆけはをのつから　尾花のなみも袖ぬらしけり※※

※も―も（高）　※※り―る（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一〇二九

原薄

于文明十三

露ふかきのはらを行はをのつから　尾花かなみも袖ぬらしけり

夕虫七日

秋はけにことはりならしきり〳〵す

我もゆふへはねにたてぬへし（七二）

露さむき籬の草のかけふかみ

くるゝもまたす虫やなくらん（七三）」九

文明千首　＊三五七

夕虫　　侍従中納言

露さむきまかきの草のかけふかみ　くるゝもまたす虫や鳴らん

雪玉集　＊巻三・秋・一〇六一

夕虫

于文明十三

露さむきまかきの草のかけふかみ　くるゝもまたす虫や鳴らん

夕初雁八日

日の影も落くる雁のこゑはして

山田のいな葉色そくれゆく（七四）

文明千首　＊三六七

夕初雁　　侍従中納言

日のかけもおちくるかりの声はして　山田の花※はいろそくれゆく

※花は―いなは（高）はなは（青）

雪玉集　＊巻三・秋・一〇八五

夕初雁

于文明十三

日の影もおちくる雁のこゑはして　山田のいな葉色そくれ行

夕鹿九日

夕されはおのへの鹿もうちわひて

おのへの鹿も音にやたつらん（七五）

たかさこや入あひのかねに聞そへて

おのへの鹿のあはれなるこゑ（七六）

文明千首　＊三七七

夕鹿　　侍従中納言

たかさこや入逢※のかねに聞そへて　おのへの鹿の哀なるこゑ

※合点アリ（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一一〇二

寄虎恋夕鹿

于文明十三

高砂や入逢の鐘に聞そへて　おのへの鹿のあはれなる声

江鶉十日

風あらき入江のうつら床さむみ

よりくる浪のうちわひて鳴（七七）

／風をあらみ入江のなみの露かけて
床さむけにもうつらなく也（七八）

文明千首　＊三八七

江鶉　侍従中納言

風をあらみ入江の波の露かけて　床さむけにもなくうつら鳴也

雪玉集　＊巻三・秋・一一二三

江鶉

風をあらみ入江のなみの露かけて　床さむけにもうつら鳴なり

関霧十一日

かたからぬ関のへたてや空にのみ
たつ河口の秋の夕霧（七九）

／関の名のけにたゝこえの道ならし
霧のへたてはよそめはかりを（八〇）」一〇

文明千首　＊三九七

関霧　侍従中納言

関の名のたかこえゆかんたち渡る　霧のへたてはよそめ□□けりを
※たかこえ―たゝこえ（高・青）
※※□□けりを―はかりを（高）斗を（青）

雪玉集　＊巻三・秋・一一四四

関霧

関の名のたゝ越ゆかむたちわたる　霧のへたてはよそめはかりを

谷月十一日　待

／よそよりはやはく暮ても夕月の
／さすかけをそき谷の下庵（八一）

／月日はや出ても猶そ松檜原
紅葉にふかき谷の下庵（八二）
御製　ふけはてゝいつる月こそをそからめ　入さへはやき谷の下いほ
可為同類歟之由　被定之間用奥歌
後日又不可為同類之由被定遂用無

文明千首　＊四〇七

谷月　侍従中納言

よ所よりははやくしれても夕月の　さすかけをそき谷の下庵
※しれても―くれても（高・青）

雪玉集　＊巻三・秋・一二三一

（谷月）

よそよりははやく暮ても夕月の　さすかけほそき谷のした庵

池月十三日

／秋さむき月を氷の色とみて
うきねよかるな池の水鳥（八三）
あしねはひぬなは乱て池の面の
水かけせはき故郷の月（八四）

文明千首　＊四一七

池月　侍従中納言

秋さむき月をこほりの色とみて　うきね夜かるな池の水鳥

※夜かるな―夜かるな（高）よかるな（青）

雪玉集　＊巻三・秋・一二五三

池月

秋さむき月を氷の色とみて　うきねよかるゝ池の水とり

磯月十四日

／さゝしまややとれる浪を吹風に

月もいそこす影やみゆらし（八五）

舟とむるいそのうきねにみわたせは

海山かけてすめる月かな（八六）

文明千首　＊四二七

磯月　侍従中納言

※さゝ嶋やゝとれる波を吹風に　月も磯こすかけやみゆらん※※

※合点アリ（高）　※※みゆらん―みゆらし（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一二七六

磯島

さゝしまややとれる波をふく風に　月もいそこす影やみゆらむ

社頭月十五日

／雲もなく八雲たつてふ八重かきの

神代へたてす月や出らん（八七）

月はいま出雲八重かき空晴て

神代へたてすすめる影哉（八八）」一一

文明千首　＊四三七

社頭月　侍従中納言

※雲もなく八雲たつてふ八重かきの　神代へたてす月や出らん※※

※雲もなく―雲もなく（青）　※※出らん―すむらん（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一二八八

（社頭月）

雲もなく八雲たつてふ八重垣の　神代へたてす月や出らん

隣月十六日

／すむ人をうらみつへしやあかすみる

月をへたつるやとの中墻（八九）

山のはの外にもうきはいらぬより

月のかくるゝやとの中墻（九〇）

文明千首　＊四四七

隣月　侍従中納言

住人をうらみつへしやあかすみる　月をへたつる宿の中かき

雪玉集　＊巻三・秋・一三〇三

隣月

すむ人をうらみつへしやあかすみる　月をへたつるやとの中かき

野分十七日

／うへたてゝあかぬ千種の花のうへに

つらき野分の風の音哉（九一）

立まよふ夕の雲のあしはやみ

野分に成ぬ秋風の声（九二）

文明千首　＊四五七

野分　　侍従中納言

うへたてゝあかぬ千種の花の上に　つらき野分※の風のをと哉

※野分の―なからの（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一四〇六

（野分）

于文明十三

うへたてゝあかぬ千種のはなのうへに　つらき野分のかせのおとかな

尋紅葉十八日

＼いさゝらはぬるともゆかん時雨ふる

山こそまつは紅葉そむらめ（九三）

何ゆへにわくる山路そ紅葉ゝを

そむる時雨はよし袖ぬらすともやぬれなん（九四）

文明千首　＊四六七

尋紅葉　　侍従中納言

いさゝらはぬる共ゆかん時雨ふる　やまこそまつは紅葉そむらめ

雪玉集　＊巻三・秋・一四四八

（尋紅葉）

于文明十三

いさゝらはぬるともゆかむ時雨ふる　山こそまつはもみちそむらめ

行路紅葉十九日

やすらふやゆくもかへるも紅葉ゝの

かけふむ道に心（の秋の旅人）とゝめて（九五）

＼かへるさのあすやたをらんけふはまた

行てにうすき秋の紅葉ゝ（九六）」一二

文明千首　＊四七七

行路紅葉　　侍従中納言

かへるさのあすや手おらん今日はまた　ゆくてにうすき道※のもみちは

※道の―ナシ（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一四六四

行路紅葉

于文明十三

かへるさのあすやたをらん今日はまた　ゆくてにうすき秋の紅葉は

松間紅葉廿日

山はいまもみつる（木々のもみちの）木々のおほはらや

をしほの小松色そすくなき（九七）

文明千首　＊四八七

松間紅葉　　侍従中納言

山は今木々の紅葉のおほはらや　をしほの小松色そすくなき

雪玉集　＊巻三・秋・一四六一

松間紅葉

文明十三

山はいま木獻のもみちのおほはらや　をしほの小松色そすくなき

暮秋霜廿一日

＼霜はまたわかもとゆひのしらなくに

秋のかたみよなにをゝかまし（九八）

をきてゆく霜※をかたみのそれも又

はかなき秋の露の別ち（九九）

※「霜」字、重書。モトノ字判読出来ズ。

文明千首　＊四九七

暮秋霜　　侍従中納言

霜はまたわかもとゆひのしらなたに（※本ノ）　秋のかたみよなにをかまし（※※）

※しらなたに―しらなくに（高）しらなたに（本ノ）（く）（青）

※※よ―に（高）

雪玉集　＊巻三・秋・一四七八

暮秋霜

霜はまたわかもとゆひのしらなくに　秋のかたみよなにをおかまし

杜時雨（廿二日）

みるまゝにしくるゝ雲も関こえて（関こえてタの雲もしくれゆく）

あはつの森の色そくれゆく（さひしき）（一〇〇）

くれゆけは猶木枯の風はやみ

しくるゝ森そかけあらはなる（一〇一）

文明千首　＊五〇七

村時雨（※）　　侍従中納言

関こえてゆふへの雲も時雨ゆく　あはつの森の色そさひしき

※村―杜（高・青）

雪玉集　＊巻四・冬・一五五九

村時雨

関越てゆふへの雲も時雨行（文明十三）　あはつのもりの色そさひしき

落葉混雨（廿三日）

たまりあへぬ木々の錦やたちかへり

時雨をそめてちりみたるらん（一〇二）

木すゑよりともにふり出てくれなゐの（枝よりも）（いまは又）

このはや雨の色をそむらし（もみち）（一〇三）」一三

文明千首　＊五一七

落葉混雨　　侍従中納言

梢よりともにふり出てくれなゐの　この葉や色をそむらし（※）（ママ）（本ノ）

※木の葉や色をそむらし（ママ）（本ノ）―木葉や雨の色を染らん（高）

雪玉集　＊巻四・冬・一五七三

落葉混雨

梢よりともにふり出てくれなゐの（文明十三）　木のはや雨の色をそむらし（ん歟）

篠霜（廿四日）

いつよりか霜は岡へのをさゝ原（をさゝはらいつより霜はをかのへや）

あらはに成ぬ松の下道（一〇四）

文明千首　＊五二七

篠霜　　侍従中納言

いつよりか霜のをかへの小篠原　あらはになりぬ松の下道

雪玉集　＊巻四・冬・一五八二

篠霜

いつよりか霜はをかへのをさゝ原（于文明十三）　あらはになりぬ松の下みち

滝氷（廿五日）

うす氷たきつ心をせきかねて

猶たえはてぬ水の音哉（一〇五）

／山姫も冬やくり出す手をさむみ
こほりにむすふ滝のしら糸（一〇六）

滝にたきつとはかりも常に詠候哉
不慥候定ありぬへく存候奥も可為計候

文明千首　＊五三七

滝氷　侍従中納言

山姫も冬やくりたす手をさむみ　氷にむすふ滝のしらいと

雪玉集　＊巻四・冬・一六〇八

（滝氷）

山姫も冬やくり出す手をさむみ　こほりにむすふ滝のしら糸（于文明十三）

浜千鳥廿六日

／いつ方に友をおきつの浜千鳥
ひとりなきても浦つたふ也（一〇七）
をのかつま猶やこぬみのはま千鳥
うらむるこゑもふけぬこの夜は（一〇八）

文明千首　＊五四七

浜千鳥　侍従中納言

いつかたに友※をおきつのはま千鳥　ひとり鳴ても浦つたふなり

※友を―露（友）を（青）

雪玉集　＊巻四・冬・一六四六

浜千鳥

いつかたに友をおきつのはまちとり　ひとり鳴てもうらつたふなり（文明十三）

初雪廿七日

／待しまにつもれる冬の日数より
あさかりけりな今（庭）朝の初雪（一〇九）
友を待程たにえやはあり明の
月（影）よりうすきけさの初雪（一一〇）」一四

文明千首　＊五五七

初雪　侍従中納言

待しまにつもれる冬の日数より※　あさかりけりな庭のはつ雪※※

※より―より（こそイ）（青）　※※はつ雪―白雪（高）

雪玉集　＊巻四・冬・一六八九

（初雪）

待しまにつもれる冬の日数より　あさかりけりな庭の初雪（文明十三）

浦雪廿八日

／こきよする千船につみて浪の上も
雪やおほわたの浦の明ほの（一一一）
雪つもる藤江のうらのあさほらけ
たつやかもめの色もわかれす（一一二）
むれてゐるかもめやいつら白妙の
藤江の浦の雪の面かけ（一一三）

文明千首　＊五六七

浦雪　侍従中納言

こきよする千船につみて波のうへも※　雪やおほわたの浦の明ほの

※も―に（青）

雪玉集　＊巻四・冬・一七二〇

浦雪

こきよする千船につみてなみのうへも　雪やおほわたの浦の明ほの（于文明十三）

閑居雪（廿九日）

ましておもへ花も紅葉もいたつらに

ふりにしまゝのやとのしら雪（一一四）

／やへむくらそれたにあるをふる雪の

門させりともみゆるやと哉（一一五）

文明千首　＊五七七

閑居雪　　侍従中納言

やへむくらそれたにあるをふる雪の　門させりともみゆるやと哉

雪玉集　＊巻四・冬・一七三一

閑居雪

八重葎それたにあるをふる雪の　門させりともみゆる宿かな（文明十三）

炉火（卅日）

／花をまつかきねの梅はつれなきに（冬こもる）（に待春を）

をのれ春はる閨のうつみ火（一一六）（まつしるものやうつみ火のもと）

文明千首　＊五八七

炉火　　［作者名闕］

冬こもるかきねの梅にまつ春を　まつしるものや埋火のもと

雪玉集　＊巻四・冬・一七五九

炉火

冬こもるかきねの梅にまつ春を　まつしる物や埋火のもと（于文明十三）

山家歳暮（十一月一日）

／年くるゝさ山かすそのしつか門

松きる道はよそにたつねし（一一七）

山ふかみ年やくるゝとかそへても

あはれ春まついとなみはなし（一一八）」一五

文明千首　＊五九七

山家歳暮　　［作者名闕］

年くるゝさ山かすそのしつか門　松きり道はよそゝたつねし（※）（※※）

※松きり―松きる（高・青）　※※よそゝ―よそに（高・青）

雪玉集　＊巻四・冬・一七八一

山家歳暮

としくるゝさ山かすそのしつか門　松きる道はよそにたつねし（于文明十三）

寄煙恋（二日）

下むせふ恋は煙のたゝなくに

人はあさしとおもひけつらし（一一九）

／よそにまてなひきやはてん夕煙

／わか思ひをはおもひけちつゝ（一二〇）（れをは人の）

文明千首　＊六〇七

寄煙恋　　［作者名闕］

よそにまてなひきやはてん夕煙（※）　わかおもふをは思ひけちつゝ（※※）

※合点アリ（高）よそにまて―よそにさて（高）よそにまて（さ）（青）

※※わかおもふをは－我おもふを（高）わかおもふをは

雪玉集　＊巻五・恋・二〇三三

（寄煙恋）

于文明十三
よそにさてなひきやはてん夕煙　我おもひをはおもひけちつゝ

寄朝恋

／今朝は又いかにねし夜の名残そと
あふとみえつる夢をしそ思（一二一）
あふとみし名残はいかてあさもよひ
きのふの夢を猶しのひつゝ（一二二）
かひなしや夢のとさしはさはらしを
立もとまらぬ霧のまよひは（一二三）

文明千首　＊六一七

寄朝恋　［作者名闕］

※けさは又いかにねし恋（ママ）のなこりそと　あふと見えつる夢をしそ思ふ

※合点アリ（高）　※※恋の－夜の（高・青）

※※※見えつる－見えつゝ（高）みへつる（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇三九

寄朝恋

于文明十三
今朝はまたいかにねしよの名残そと　あふとみえつる夢をしそおもふ

寄野恋

身ははやくふる野の小篠霜とちて
かよはぬ中にくちはてねとや（一二四）

／みせはやなまのゝ小すけの下みたれ
まろねよふかき露も涙も（一二五）

文明千首　＊六二七

寄野恋　［作者名闕］

みせはやなまのゝ小すけの下乱れ　まろね夜ふかき露も泪も

雪玉集　＊巻五・恋・二〇四八

（寄野恋）

于文明十三
みせはやなまのゝこすけの下みたれ　まろね夜ふかき露もなみたも

寄河恋

／猶そおもふおき中川とたのめても
いかなるせにかたえんとすらん（一二六）
下にかよふ心へたつなにほとりの
おき中川と猶たのめてん（一二七）」一六

文明千首　＊六三七

寄川恋　［作者名闕］

※猶そおもふおき中川とたのめても　いかなるせにかたゝんとすらん（ママ）

※合点アリ（高）猶そ－ねをそ（高）

※※たゝんと－たへんと（高）たゝむと（青）

雪玉集　＊巻四・恋・二〇五九

（寄河恋）

于文明十三
猶そおもふおき中河とたのめても　いかなるせにかたえんとすらん

寄嶋恋

〳〵うつり香や猶あかさりし橘の
こしまの浪を袖にかけても（一二八）
はてはうき名にたち花のこしまとも
しらてやとめしよはのうき船（一二九）

文明千首　＊六三七

寄嶋恋　［作者名闕］

※うつりかや猶あかさりしたちはなの　※※こしまの波を袖にかけても

※合点アリ（高）

※※こしまの波を―こしまか波を（高）こしまの色を（青）

雪玉集　＊巻四・恋・二〇六四

寄嶋恋

于文明十三うつりかや猶あかさりし立はなの　こしまの波を袖にかけても

寄禁中恋

〳〵みかは水なかす紅葉のうへにしも
ふかき思ひの色はみえけん（一三〇）
〳〵身にそしむ九かさねのうちにても
人の心のあきのあらしは（一三一）

文明千首　＊六五七

寄禁中恋　［作者名闕］

※身にそしむ九かさねの中にても　人の心の秋のあらしは

※身にそしむ―身にそしる（高・青）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇六七

寄禁中恋

于文明十三身にそしむ九かさねの中にても　人のこゝろのあきのあらしは

寄井恋

よしや又山井の水の猶たのむよし山の井のあさくとも
まれにも人の影しみえなは（一三二）
〳〵とけかたき人のつらゝにむすほゝれ
影たにみえぬ山の井の水（一三三）

文明千首　＊六六七

寄井恋　［作者名闕］

※とけかたき人のつらさに山の井の　かけをみるへきたよりたになし

※つらさに―つらゝに（高）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇六九

寄井恋

于文明十三とけかたき人のつらゝに山の井の　かけをみるへきたよりたになし

寄忍草恋九日

〳〵うしとみしなけのなさけもかれはつる
後そしのふの種となりけり（一三四）
人を猶わすれもはてぬ心にそ
しのふる草はしけりそひける（一三五）」一七

文明千首　＊六七七

寄忍草恋　［作者名闕］

※うしとみしなけのなさけもかれはつる　後そ忍の種となりける

※なりける―成ぬる（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇七三

寄忍草恋

うしとみしなけのなさけもかれはつる（于文明十三）　後そ忍ふのたねと成ける

寄萱恋（十日）

かよひこし野へのかや原末つゐに

色かはり行中もあらまし（一三六）

〈かれゆく中にみたれわひつゝ

文明千首　＊六八七

寄萱　［作者名闕］

かよひこし野へのかやはらすゑつゐに　かれ行中にみたれわひつゝ※

※みたれわひつゝ―乱とひつゝ（高）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇七七

寄萱恋

かよひこし野へのかや原すゑつゐに（于文明十三）　かれ行中にみたれわひつゝ

寄椿恋

〈玉椿二たひかはるかけはあれと（も）

人のつらきそおなし色なる（つらきなけき）（猶ときは）（一三七）

秋の夜の八千よをねても玉椿

あかぬ心やときはならまし（一三八）

文明千首　＊六九七

寄椿恋　［作者名闕］

玉椿ふたゝひかはるかけもあれと　つらきなけきそ猶ときはなり※（ママ）

※ときはなり―ときはなる（高）ときは也（なる）（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇九三

寄椿恋

玉椿ふたゝひかはるかけもあれと（于文明十三）　つらきなけきに猶ときはなる

寄柞恋（十二日）

〈せきあへぬ袖は色にもいつみ川

ちるやはゝそのもりぬへき名よ（一三九）

柞原人の秋よりいつみ川

袖になかるゝ色もわりなし（一四〇）

文明千首　＊七〇七

寄柞恋　［作者名闕］

せきあへぬ袖は色にもいつみ川　ちるやはゝそのもりぬへきなり※

※なり―なよ（高）

雪玉集　＊巻五・恋・二〇九四

寄柞恋

せきあへぬ袖は色にもいつみ川　ちるやはゝそのもりぬへき名よ

寄雉恋（十三日）

ねにたつる焼野ゝきゝすそれも猶

かくはこかるゝ思ひならしを（一四一）」一八

文明千首　＊七一七

寄雉恋　［作者名闕］

※ねにたつる焼野ゝきゝすそれも猶　かくはこかるゝ思ひならしを

※ねにたつる焼野ゝ―本ノねたつる焼の（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二一〇一

寄雉恋

ねにたてる焼野のきゝすそれも猶　かくはこかるゝ思ひならしを

寄鴛恋十四日

生田川ゐるてふ鳥のその名をも

なかれ行名にかけてわひつゝ（一四二）

文明千首　＊七二七

寄鴛恋　［作者名闕］

生田川ゐるてふ鳥のその名をも　なかれ行名にかけてわひつゝ

雪玉集　＊巻五・恋・二一〇二

寄鴛恋

生田川ゐるてふ鳥のその名をも　なかれ行名にかけてわひつゝ

寄虎恋十五日

をとにきく虎ふす野への道ならて

かひなき恋に身をや捨てん（一四三）

我床やとらふす野へと成ぬらん

一夜も人のきてもとまらぬ（一四四）

文明千首　＊七三七

寄虎恋　［作者名闕］

をとにきくとらふす野への道ならて　かひなき恋に身をや捨なん

雪玉集　＊巻五・恋・二一〇八

寄虎恋

をとにきくとらふすのへの道ならて　かひなき恋に身をや捨なむ

寄促織恋十六日

身を秋のはたをる虫も恋衣

くちぬる袖のあはれをやしる（一四五）

文明千首　＊七四七

寄促織恋　［作者名闕］

身を秋のはたを※る虫も恋衣　くちぬる袖のあはれをやとふ

※をる―おる（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二一一二

寄織促恋

身をあきのはたをる虫も恋ころも　くちぬる袖のあはれをやとふ

寄枕恋十七日

又いつと枕はしるや逢事の

これやかきりと身を歎くよに（一四六）

あさからぬ心をともにかはしまの

浪のまくらよあふせへたつな（一四七）」一九

文明千首　＊七五七

寄枕恋　［作者名闕］

又いつと枕はしるやあふことも　これやかきりと身をなけくよに

雪玉集　＊巻五・恋・二一一八

寄枕恋

又(于文明十三)いつと枕はしるやあふことも　これやかきりと身をなけくよに

寄筆恋(十八日)

〳〵思ひわひ　〳〵思ひわひ　〳〵こそ　〳〵あへね　〳〵[やられ]　〳〵[の]
いまはたゝかきたにやらし水茎も

〳〵[をよは■]　〳〵やたえなん　〳〵ねは
をよはんほとのうらみならぬを（一四八）

文明千首　＊七六七

寄筆恋　　[作者名闕]

おもひわひかきこそあへね水くきも　をよはんほとのうらみならねは

雪玉集　＊巻五・恋・二一二八

寄筆恋

思ひわひかきこそあへね水茎も　およはむ程のうらみならねは

寄挿頭恋(十九日)

かしは木の[かさしも(おなしかさしの)■■(を)]さしもなと
落葉なりとはうらみはてけん（一四九）

〳〵さしも(その)木おなしかさしをかしは木の
落葉なりとは~~おなしかさしを~~何うらみけん（一五〇）

文明千首　＊七七七

寄挿頭※　　[作者名闕]

※※さしもそのおなしかさしをかしは木の　※※※おち葉なりとはなにうらみけん

※寄挿頭－寄挿頭恋（高）（青）　※※合点－ナシ（高）（青）

※※※おち葉なりとは－おちなりことは（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二一三五

寄挿頭恋

さしもそのおなしかさしはかしは木の　落葉なりせはなに恨みけん

寄碇恋(廿日)

しられしな千尋(の)ある海のいかりなは
下にくるしく(むすほゝる)■■■とも（一五一）

〳〵契しはうきたる船のいかり縄
いかさまにせんよるへなき身を（一五二）

文明千首　＊七八七

寄碇恋　　[作者名闕]

ちきりしはうきたる舟のいかりなは　いかさまにせんよるへなきみを※

※みるへなきみを－よるはなき身を（青）

雪玉集　＊巻五・恋・二一四〇

寄碇恋

契(于文明十三)しはうきたる舟のいかりなは　いかさまにせむよるへなき身を

寄斧恋(廿一日)

≠くちはつるたもとよいかにをのゝえのためし(にはあらぬ)はしらぬ
をのゝえのためしにはあらて年をふる(恋の山人)
恋の山人くたす(袖そ朽ぬる)袖かな（一五三）
をのゝえのくちしためし(ゆゆし)や(も)年をふる
恋の山ちの袖にのこれる（一五四）

〳〵をのゝえにあらぬ袂やいたつらに　くちて年ふる恋の山人（一五五）」二〇

文明千首　＊七九七

寄斧恋　［作者名闕］

をのゝえにあらぬたもとや徒に　くちてとしふる恋の山人

雪玉集　＊巻六・雑・二一四二

寄斧恋

于文明十三

をのゝえにあらぬ袂やいたつらに　朽てとしふる恋のやま人

岡椎廿二日

〳〵さえくらしみそれ吹まく山かせに

椎の葉さむき岡こえの道（一五六）

冬かれの岡へにたてる椎の葉に

もる影さむき夕附日かな（一五七）

文明千首　＊八〇七

岡椎　［作者名闕］

さえくらしみそれ吹※まゝ山風に　椎の葉寒き※※岡こえのみち

※吹まゝ―吹まく（高）（青）

※※岡こえ―岡こへ（青）

雪玉集　＊巻六・雑・二二二三

岡椎

于文明十三

さえくらしみそれ吹まく山風に　椎の葉さむき岡越のみち

路芝廿三日

〳〵ふみわけてつかふる道のしは〳〵も

〳〵しけきめくみの露をしそ思

かれすそたのむ露のめくみを（一五八）

兼ゆめくみを猶たのむかな

猶たのむつかふる道のしは〳〵も

露のめくみにかゝりける身は（一五九）

かれははてしと

文明千首　＊八一七

路芝　侍従中納言

ふみわけてつかふる道のしは〳〵も　しけきめくみの霜※をしそ思ふ

※霜―露（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二二四七

路芝

廿三日着到歌歟

踏分てつかふる道のしは〳〵も　しけきめくみの露をしそ思ふ

名所原廿四日

〳〵梢（より）にはたまりもあへす乱つゝ

玉こきちらす霰松はら（一六〇）

〳〵誰かみる花も紅葉もいたつらに

みかきか原はふりのこりても（一六一）

文明千首　＊八二七

名所原　侍従中納言

梢よりたまりもあへすみたれつゝ　玉こきちらすあられまつ原

※たまり―たより（青）

雪玉集　＊巻六・雑・二三九四

名所原

廿四日御着到

梢よりたまりもあへすみたれつゝ　玉こきちらすあられ松はら

名所湊廿五日

さゝなみや海吹ひらの湊風
高ねの雪のかけくたく也（一六二）
文明千首　＊八三七　侍従中納言
名所湊
さゝなみやうみ吹ひらのみなと風　たかねの雪のかけはらふなり
雪玉集　＊巻六・雑・二三九五
名所湊
さゝ浪やうみ吹比良の湊かせ　たかねの雪のかけはらふなり

名所渡
すむ月のいる方とをくむしあけの
せとまてこよとうたふ船人（一六三）
身のはてよいかゝなるとにたつ浪の
あはれしつけき時のまもなし（一六四）
文明千首　＊八四七　侍従中納言
名所渡
身のはてよいかゝなるとにたつ波の　哀しつけき時のまもなし
雪玉集　＊巻六・雑・二三九九
名所渡
身のはてよいかゝなるとに立波の　あはれしつけき時のまもなし

羇中橋
旅衣浪かけそへな露霜も
いくかゝほさぬまゝのつき橋（一六五）

文明千首　＊八五七
羇中橋　侍従中納言
浪かくる橋のころもは露霜の　ほさていく日のまゝのつきはし
※橋－旅（高）たひ（青）　※※露霜の－露霜を（青）
※※※ほさて－おさて（青）
雪玉集　＊巻六・雑・二三八六
羇中橋
波かくる旅のころもは露霜の　ほさていく日のまゝのつきはし

羇中潟
いそなつみかへるあま人やとしはし
かしゐのかたは暮はてぬ也（一六六）
暮にけり誰かはやとをかしゐかた
かた［く⇩し］く浪も心あらなん（一六七）
文明千首　＊八六七
羇中潟　侍従中納言
※いそへつみかくるあま人やとしはし　かしゐのかたはくれはてぬなり
※いそへつみ－いそへ［　］（高）いはへつみ（青）
※かくる－かへる（高）
雪玉集　＊巻六・雑・二三八九
羇中潟
いそなつみかへるあま人やとしはし　かしゐのかたはくれはてぬ也

山家夕

／あらましに思ひやられし夕くれの
あはれは物かみ山への奥（一六八）
うき世をはしのふとなしに山さとの
夕になれは物そかなしき（一六九）
山ふかみ夕になれはそれとなく
うき世おほえてぬるゝ袖哉（一七〇）」二二

文明千首　＊八七七

山家夕　　侍従中納言

あらましにおもひやられし夕くれの※　あはれは物かみ山へのおく

※おもひやられし―思ひやらまし（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二三三六

山家夕

于文明十三
あらましに思ひやられし夕くれの　あはれは物かみやまへのおく

山家苔十二月一日

／跡しあらは人もこそとへ嶺の庵
いさふみかへん苔のかよひち（一七一）
世中をのかるとならは苔の下に
くつとも出ん山のおくかは（一七二）

文明千首　＊八八七

山家苔　　侍従中納言

跡しあらは人もこそとへみねの庵　いたふみかへん苔のかよひち※

※いた―いさ（高）いた（青）

雪玉集　＊巻六・雑・二三四一

山家苔

文明十三
跡しあらは人もこそとへみねの庵　いさふみかへんこけのかよひち

田家煙二日

稲葉
山田もることをやくにて秋は猶
煙たえせぬ里のをちこち（一七三）

／いな葉もる生田の里の夕煙
心ほそさをとふ人もなし（一七四）

文明千首　＊九八七

田家煙　　侍従中納言

稲葉もるいく田の里の夕けふり　心ほそさをとふ人もなし

雪玉集　＊巻六・雑・二三五五

田家煙

于文明十三
いな葉もるいくたのさとの夕けふり　心ほそさをとふ人もなし

夢驚三日

さめてこそみしを夢とも思ひしれ
おとろきはてぬ世をいかにせん（一七五）

文明千首　＊九〇七

夢驚　　侍従中納言

さめてこそ見しを夢とも思ひしれ※　おとろきはてぬ此世いつまて

※しれ―しに（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二四二九

夢驚

さめてこそみしを夢とも思ひしれ　おとろきはてぬこの世いつまて（于文明十三）

懐旧涙（四日）

／わすられぬおやのいさめのことの葉そ（思ひいつる）
しのふの露のをき所なる（一七六）」二三

文明千首　＊九一七

懐旧涙　侍従中納言

わすられぬおやのいさめのことの葉そ　しのふの露の置そなる（※本ノマヽ）
※をき所なる（高）置そなる（本ノマヽ）―置そなる（玉とをくイ）（青〔「玉」字左傍ニ「（」ノ如キ記号アリ〕）

雪玉集　＊巻六・雑・二四六六

（懐旧涙）

わすられぬおやのいさめのことの葉そ　忍ふの露のをき所なる

寄露述懐（五日）

はつかしなはかなき露のことの葉を
千くさの花の中にのこして（一七七）
／ことの葉のはかなき露をいかにして
千種の花の中にのこさん（一七八）
ことの葉のはかなき露もきえさらは（ち ら）
千種のかすにをきてやはみん（一七九）

文明千首　＊九二七

寄露述懐　侍従中納言

ことのはのはかなき露をいかにして　花の千種のかすにをくらん

雪玉集　＊巻六・雑・二四四四

寄露述懐

ことの葉のはかなき露をいかにして　花の千種のかすにをくらん（于文明十三）

寄河述懐（六日）

行末のうき身よいかによしの河
はやくみし世に思ひ出はなし（一八〇）
／ふかくこそ思ひとりなめよしの河
はやくこん世をさとる身ならは（一八一）

文明千首　＊九三七

寄河述懐　侍従中納言

※ふかくよりおもひとりなめ芳野川（※※）　はやくこん世をさとるみならは（※※※）
※（高）合点アリ　※※より―こそ（高）より（こそイ）（青）
※※※とりなめ―よりなめ（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二四五〇

寄河述懐

ふかくこそ思ひとりなめよしの川　はやくこん世をさとる身ならは（于文明十三）

春日（七日）

／春日山藤のうら葉のうらもなく
たのむに神はあはれかくらし　（一八二）
うき身そと思ひはすてし三かさ山（をも神はすてしな）
さすかに我も藤の末葉を（一八三）

文明千首　＊九四七

春日　　侍従中納言

※かすか山藤のうら葉のうらもなく　たのむに神は哀かくらし

※（高）合点アリ

雪玉集　＊巻六・雑・二五一八

（春日）

春日山藤のうら葉のうらもなく　たのむに神はあはれかくらし

貴布祢八日

そのかみに契やかけし貴布祢川

すみこし山のかけをおもへは（一八四）

神はいかにわすれぬ物を貴船河

うきせゝにしもわたりこし世は（一八五）」二四

文明千首　＊九五七

貴布祢　　侍従中納言

神はいかにわすれぬものを貴船河　うきせゝにしも渡りこ※し世は

※こし―せし（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二五二〇

貴布祢

于文明十三

神はいかに忘れぬ物をきふね川　うきせゝにしもわたりこし世は

如是縁九日

よしや身のなにはの事も前の世の

えにしあれはと思ひとらなん（一八六）

文明千首　＊九六七

如是縁　　［作者名闕］

※※よしや身の難波の事も前の世の　えにしあれはと思ひとゝめん※※

※（高）合点アリ　※※よしや―うしや（高）

※※※とゝめん―とらなん（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二五〇二

如是縁

于文明十三

よしや身のなにはの事も前の世の　えにしあれはと思ひとらなむ

声聞界十日

一枝の花にほゝゑむ色みせて（にほゝゑむ色とみせしより）

やかて心をうつしつる哉（心の花を）（一八七）

文明千首　＊九七七

声聞界　　［作者名闕］

※一枝の花にほゝえむいろみせて※※　やかて心をうつしつるかな

※（高）合点アリ　※※ほゝえむ―ほゝえん（高）

※※※みせて―みへて（高）

雪玉集　＊巻六・雑・二五〇一

声聞界

于文明十三

一えたのはなにほゝゑむ色みせて　やかてこゝろにうつしつるかな

寄国祝十一日

すむを空にこるを地とわかちをく

神のみ国はけにうこかめや（一八八）

／君と臣の道ある国そすむを空

にこるをつちとわかちをくより（一八九）

文明千首　＊九八七

寄国祝　［作者名闕］

君と臣の道ある国そすむを空※　にこるをつちと別ちをくより※※

※空―そらに（青）空に（高）　※※より―成（青）

雪玉集　＊巻六・雑・二五五三

于文明十三

君と臣のみちある国そすむをそら　にこるをつちとわかちをくより

寄榊祝十二日

君をいのる千とせのかけはかねてより

神やみむろの山の榊葉（一九〇）

／君か代のたちさかゆへきためしもや

かねてみむろの山の榊葉（一九一）」二五

文明千首　＊九九七

寄榊祝　［作者名闕］

※きみか代のたちさかゆへきためしもや　かねてみむろの山の榊葉

※（高）合点アリ

雪玉集　＊巻六・雑・二五五八

寄榊祝

于文明十三

君か代の立さかゆへきためしもや　かねてみむろの山のさか木葉

禁裏千首着到和哥

自九月朔日始之至藹

十二日終之題中院亜相

亭之題也御人数

加左

御製　　信前内大臣

旧院上藹　　中院一位通秀

海住山大納言高清　　按察使親長

下官　　四辻宰相中将季経

姉小路宰相基綱　　右衛門督為広

（一行分空白）

右一冊少〻請飛鳥

井中納言諷諫但自

寄筆恋以下彼卿

歓楽之間固辞不及

訪指南惣而当年殊

以外卒爾詠作」二六

尤多其憚不可及

他見者也

（一行分空白）

権中納言従三位兼侍従藤（花押）

（以下空白）

（半葉空白）」二七

【略解題】

底本とした宮内庁書陵部図書寮文庫蔵本〔五〇三・二四二〕の書誌をまづ記載しておく。

袋綴装一冊。一〇×一五cmの横本。現前表紙は、江戸期に付されたものと思はれる。焦げ茶地亀甲文様の緞子。題簽（八・六×二・三cm、鳥の子紙、朱地に金泥で雲霞草花を描く）が現前表紙左上に貼付せられ、「逍遥院詠草」と墨書される。本文とは別筆であり、表紙同様、江戸期におけるものであらう。

原前表紙が、本文共紙、中央に、

日課草　文明十三
詠草　九月

と墨書される。「詠草」は原本では読みにくいが、一つの試みの読みとして提示しておく。実隆筆とは見にくく、後世の筆によるものかと思はれる。

本文料紙は楮斐交漉。遊紙が首尾に各一丁置かれ（ただし、本来は原前表紙・後表紙であつたもの）、墨付は二七丁。蔵書印は、「圖書／寮印」（方朱印、墨付一丁表右上）、「月明荘」（長方朱印、墨付二七丁裏左下）、以上二顆捺される。一面一〇～一三行書、和歌一首二行書。文明十三年九月、三条西実隆自筆なるべし。三条西家旧蔵。

本書が初めて紹介されたのは、『弘文荘待賈古書目』第二六号（一九五一・六）においてである。前記書誌と重なる部分もあるが、以下抄記しておく。

四六二　日課草 原本 三条西実隆自筆　一帖　八、五〇〇円

縦一〇糎横一六糎、半紙半切より少し小形の横本、行数不等。原表紙に打ちつけに

日課草　九文明十三

とあり。九月一日より十二月十二日まで百日間、日々所詠の和歌一首乃至二首を書き留めたるもの。巻末に

（識語＝略）

とあり。即ち同年九月より十二月迄に行はれたる有名なる文明千首の時の詠の下書なり。加筆訂正多し。墨付二十八枚。原装雅本。

○

本詠草は、文明一三年（一四八一）九月一日より同年一二月一二日まで、後土御門天皇が催した着到千首和歌（所謂『文明千首』）のために、三条西実隆が詠じた歌稿と考へられる。

『文明千首』に関しては、三村晃功「内閣文庫蔵『文明十三年着到千首』―解題・本文・初句索引―」（『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』四二、二〇〇四・一二）、別府節子「「着到和歌」について―「文明十三年着到千首短冊」を中心に―」（『出光美術館研究紀要』二二、二〇一六）に詳しい。なほ、『文明千首』には、本書に合点がかけられた歌がとられてゐる。

別府論によれば、多くの自筆短冊が確認出来るものの、実隆の短冊は一枚として確認出来ないとのこと。その意味で、本書は、実隆自筆歌稿であり、研究リソースとしても重要な意義を有するものといへよう。

本書には書入れが多数なされてゐるが、この事情は、巻末識語によつて明らかになる。再度、識語を引用しておく。

右一冊少ゝ請飛鳥
井中納言諷諫但自
寄筆恋以下彼卿
歓楽之間固辞不及
訪指南惣而当年殊
以外卒爾詠作」二六
尤多其憚不可及
他見者也
（一行分空白）
権中納言従三位兼侍従藤（花押）

まづ文明十三年時の『実隆公記』の残存状況について確認しておきたい。当該年の『実隆公記』は、自筆本が尊経閣文庫に所蔵されるが、正月一日より七月十二日までの記事しか存せず、残念なことに本歌稿の成立事情を、『実隆公記』からうかがふことがかなはない。なほ、尊経閣文庫本表紙裏書に、以下の如き記事が見られるといふ（続群書類従完成会本・一下・四一三頁）。

六月以下落々無正躰、七月院号定事、別記巨細也

ここでいふ「無正躰」の意味は推し難いが、翌十四年も別記を除けば『実隆公記』が伝存してゐないことを考へると、実隆側にやや長期にわたるなんらかの事情が存したと覚しい。体調不予であつた故かどうかは判断しかねるが、恐らくさうではあるまい。そもそもこの歌稿をものとしてゐることからも、体調不予とは考へ難いが、文明十三年後半の、実隆の文藝活動をうかがふいま一つの資料として、『種玉編次抄』の以下の識語を見てみたい。

右抄宗祇法師此物語講談之次一部之本云
内偏次縦横難啓愚蒙之所ゝ聊加
諮問之処近曽以今案有勘出之抄
後日可免電覧云々遂而携一巻来則
命管城子令写之訖須謂此道至
宝規者不可以其近忽之也
于時文明十三辛丑無射二十有一日　実隆卿
権中納言従三位兼行侍従藤原朝臣

（九州大学附属図書館細川文庫蔵本〔五〇－四－五四五－ケ－五九〕による）

無射（九月）二一日、宗祇持来の（恐らくは宗祇自筆）『種玉編次抄』を「管城子」に命じて書写せしめ、巻末に識語を加へた、といつた事情が見て取れる。実隆自身が書写した訳ではないので、積極的な徴証にはならないが、非体調不予の傍証として見ておきたい。

因みに、この裏書でいふ「別記」は、「嘉楽門院院号定記」（続類従完成会本・九所収）のことを指す。

話を本題に戻す。実隆のこの識語によれば、「飛鳥井中納言」に「諷諫」を「請」うたものが、即ちこの歌稿といふことになる。文明十三年における「飛鳥井中納言」は飛鳥井雅康である。しかし、この雅康による「諷諫」は、雅康の「歓楽（＝病）」により、十一月十七日詠の寄枕恋（一四六・一四七）までで終はらざるをえず、寄筆恋以下最後まで、「指南」のために（飛鳥井亭ヲ歟）「訪」ふことはかなはなかつた、といふ事情が読み取れる。

この時期、雅康は、自らの進退に関する岐路を迎へてゐた。井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期』より、関連する箇所を引用する。

雅康は十一年四月、たつての希望で権中納言に任ぜられたが、親長記十三年八月廿七日の条によると、在国していた参議正親町公兼が近頃上京してきたので、かねての勅約によつて、即ち雅康は早々に辞すべき由を約していたので、雅康に辞退すべき命を下した。所が、九月に入つて、雅康は、拝賀を未だ遂げていないから、それを遂げてから、という事を述べた。結局十二月に至つて辞し、公兼が昇進したのであるが、これは雅康の大きな不満であろう。（前掲書・二四九～二五〇頁）

雅康は、翌文明十四年二月、出家する。雅康にとつて、身の処し方に煩悶したであらう丁度その時に、実隆からの『諷諫』依頼があり、少なくとも十一月半ば過ぎあたりまでは、実隆の需めに従つてゐた、といふことになる。

従つて、識語でいふ「歓楽」を、直ちに字義通り受け取つてしまふのは、ややナイーブに過ぎるかと思ふ。以下、その傍証たりうる歟と思はれる事例を紹介しておく。

この年十月一日、義尚は、後に『（将軍家）三十番歌合』として結実する三首歌会を行つた。この歌合は衆議判で、褒貶に親長・実隆・為広らが加はつた。その折、雅康も褒貶参加を促されたが、口伝なきを以て辞退してゐる。『親長卿記』（史料纂集本による）の関連記事を引くと、

三首愚詠早旦進上之……暫詣飛鳥井中納言許、談合此子細、令参仕歟之由尋之、申歓楽之由了、其謂者、為御歌合者、自兼日被仰下、吾相触可得其意之処、無其儀、其上褒貶之儀未口伝之間、難参仕云々、和歌棟梁之仁不参之処、愚老等参仕存不可然之由間、申入故障之由了……（同日条）

雅康のこの頑なな姿勢は、歌合披露の時まで一貫してゐる。

飛鳥井中納言、褒貶事未口伝之間、申難参之由、雖然再往仰之間、可候其席之由申之云々（十一月廿日条）

即ち、雅康は、その場に同席するところまでは妥協したものの、褒貶そのものには加はらなかつた、といふのである。

実隆は褒貶に加はつてをり、この雅康の頑なな姿を一ヶ月余りまのあたりにして来たのであらう。

以上のことを総合して鑑みるに、実隆識語でいふ雅康の「歓楽」は、文字通りの「歓楽」ではなく、「申歓楽」と解すべきであらうと思ふ。また、実隆も、雅康のかかる心中を慮つてであらう、「不及訪指南」といふ判断をしたのだと思はれる。

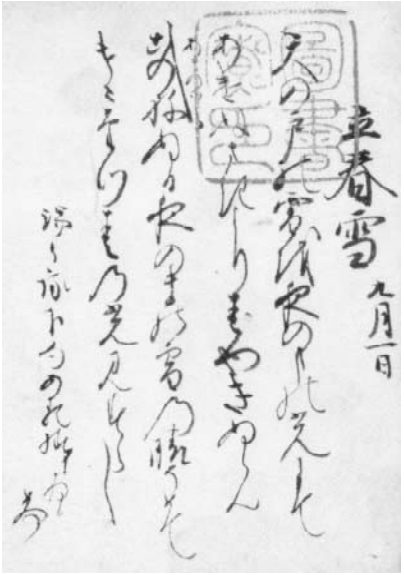
なほ雅康は、この「諷諫」時期の初め、九月十八日、大島本『源氏物語』関屋巻の書写を終へ、識語を書きつけてゐる。

○

雅康の「諷諫」の実態を、この歌稿の〝どこ〟に見出すべきか、これはなかなか厄介な問題である。仮に実隆の言をまるまる信ずることとすれば、「寄筆恋」以下に、雅康の「諷諫」は存しないはずである。とすると、「寄筆恋」以下に見られる多くの詠み直し、改稿案、付随する合点・ミセケチ・墨滅等、それらは全て実隆自身の手によるもの、といふことになる。このことを、「寄筆恋」以前に適用すれば、これら「詠み直し、改稿案、付随する合点・ミセケチ・墨滅等」を減じて残つたものが、即ち、雅康の「諷諫」といふことにならう。

確かに、「寄筆恋」以前の部分には、評語と覚しき書入れが、数は少ないながらも散見される。その一例を、冒頭部分、「立春雪」

題歌について見てみよう。



末尾小字で記載されゐる「端之詠下句ある様に存候／如何」が、雅康の「諷諫」と解されるのである。評語の内容といひ、「存候」「如何」といふ文体といひ、そのやうに解して齟齬は来すまい。

さらに、和歌本文の「あ」字と、評語の「あ」字を仔細に比較するに、若干の懸隔を見出し得、評語が雅康自身の筆になる可能性も残らう。

○

本書は、かれら公家歌人が、いかに辛苦を重ねて表現を獲得しようとしてゐたか、そのありやうを如実に物語る貴重な資料といへよう。それは、ひとり実隆にとどまらず、程度の差こそあれ、多くの歌人にひとしなみに認めうるものであらうと思ふ。

【追記】

二〇一八年一〇月七日、平成三〇年度・和歌文学会・第六四回大会（於國學院大學）において、川上一「文明十三年着到千首をめぐって―「着到」と「続歌」の再考―」といふ口頭発表があつた。残念ながら、小論には川上氏の研究成果は全く反映出来てゐない。特に、川上氏が見出した清書原本（宮内庁書陵部図書寮文庫本〔鷹・六四七〕）との比校は、必須の学的手続きであらうと思ふが、あげて今後の課題としたい。